

5

さが文化

2010年(平成22年)9月29日(水曜日)

美術

野中 耕介

佐賀県美術展(以下県展)が今年で60回を迎えた。近年、財政上の困難や応募作品と入場者の減少など、運営の苦心が伝えられる県展だが、入場者にかんじていえば、今年も節目の年でもあり、またスタッフのためにも努力により、例年に比して多くの方が来場された。

応募総数は増加している部門もあればその逆もあり、残念ながら全体で昨年より20点ほど減った(なかでも最も減少したのは洋画部門)。出品者の年齢の内訳を見ると、60歳以上の出品者が全体の半分を占め、30〜40歳代の出品が少ない。

県内文化

県展の主たる意義を「新人の育成と若人の発掘の場」(薄口京子「県美術展の事務局40年」より)「県展40周年記念誌」平成2年、佐賀県教育委員会と見なしたかつてに比べ、現在は時代の趨勢かだいぶ様変わりしている。しかし「新人」ということ

でいえば、実は年齢は関係がなく、要は佐賀県の美術の水準を押し上げてくれる高い質をそなえた作品を生み出し、かつ、創作を趣味として自己実現の範疇にとどめることなく、今一歩踏み込み、現今のアートシーンに積極的にいかかわっていく作家としての意識、姿勢があればよいわけである。

今年の県展の洋画部門に

衛藤氏の受賞は氏

県展と「ふたたびの新人」

氏によれば、本作は画学生時代以来久しぶりに制作した大作であり、県展への出品はふたたび「作家として創作の場に返り咲くことを願ったことであつたという。」「払暁」とは明け方の意味で、本作は衛藤氏の、新たな自己の確立に向けての決意表明ともいふべきものである。衛藤氏の受賞は氏の教え子たち、生徒たちにも広く知るところになったはずである。生徒たちは日ごろ親しく接している恩師が、美術作家として高度な画技を有していることに驚き、絵画を深く理解し、表現を追求するすがたに改めて畏敬の念を抱くのではなからうか。氏から美術を習うことを

(県立美術館学芸員)

文化時評

2010